

☆帝国主義の侵略反革命を粉碎し全世界の帝国主義を打倒せよ！ スターリン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命—世界プロ独一共产党を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

1986年  
3月25日  
第368号  
編集発行人 高木一夫  
一部 200円

# 烽火

NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31  
とみやビル15号 Tel(06)371-3706

○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫  
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

# 天皇・サミット闘争に起て

国際階級闘争の新たなうねりと連帶せよ！



マラカニアン宮殿に突入するフィリピン人民(2月25日)

全国のたたかう労働者人民諸君！

本年最大ともいえる天皇在位六〇年式典と東京サミットをめぐる階級攻防戦が開始された。日本帝国主義は史上最大級の警備体制を首都・全国にとりめぐらせ、プロレタリアートの革命的政治決起を封じ、この天皇・サミットの二大攻撃を暴力的に貫徹しようとしている。天皇式典やサミットに反対するものは國家の敵だとする首相発言や新聞論調が堂々とまかりとおっている。式典もサミットも「国際国家日本」（中曾根）の帝国主義が、アジアなどへの侵略反革命を飛躍的に強化しようとするものであり、絶対に許すことはできない。それはニカラグア、フィリピン、南朝鮮、南アフリカなど全世界のたたかうプロレタリアート人民に直接に敵対するものである。敵階級の全体重をかけた攻撃と対決し、天皇・サミット闘争への革命的大衆的な決起を実現せよ！

## 1 帝国主義の世界支配 搖がす民族解放闘争

国際階級闘争は反帝民族解放闘争を最前線としながら、ベトナム革命以来のふたたびの高揚期を迎えてある。七五年ベトナム革命勝利後の一時期、イラン革命（七九年）にみられたような反帝民族解放闘争と共産主義革命の完全な切断という事態や、また中国・ベトナム戦争（七九年）に示された国際共産主義運動の分裂と後退という事態のなかで、反帝民族解放闘争は大きな困難を強いられた。

だが七九年のニカラグア革命の偉大な勝利を皮切りに、南アフリカで、フィリピン・南朝鮮をはじめとした東アジアで、そしてニカラグアにつづくエルサルバドルなど中米諸国で、帝国主義の新植民地主義支配を打倒し、民族の解放を求めるプロレタリアート人民のたたかいが、共産主義との結合の可能性を秘めながら前進をはじめた。アフリカにおいてもっとも良く組織されたプロレタリアートを有している南アフリカ人民のたたかいは、

本年に入つてからも止むことのない英雄的で大衆的な決起を生みだしつづけている。二月

一九日には黒人活動家の葬儀にたいする弾圧

### 『本号の内容』

#### 天皇・サミット闘争基調

(P1~7)

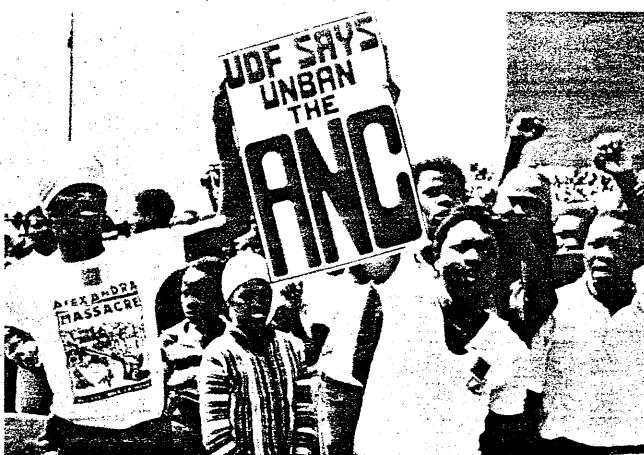
#### ■ フィリピン情勢に関する見解

(P8~10)

#### ■ 八六春闘アピール

(P10~11)

を契機にして人民の怒りが爆発し、多くの死者をだしながらも、軍との実力戦闘がたたかわれた。白人ボタ政権リアペルトヘイトにたいする南アプロレタリアートの決死的なたかかいは、南ア資本主義の打倒という課題を内包しつつ持続している。ANC（アフリカ民族会議）とこのなかで少なからぬ影響力、指導力を有する南ア共産党にとって、その民主主義革命路線の実践的変更が強く要求されている。



ANCへの支持を訴える人々(南アフリカ)

フィリピンにおいても同様の着点につき当っている。マルコス独裁の打倒とアキノ新政権の誕生を決定づけたフィリピン人民の決起は、フィリピン共産党と新人民軍に旧来の民主主義革命路線と解放区戦略からの脱却と飛躍を要求している（詳しくは別掲論文）。

フィリピンの高揚が波及するかのように、韓国において、反共軍事独裁政権にたいするたたかいが急速な広がりをみせていている。新韓民主党と民主化推進協議会を中心とした改憲運動（大統領選挙を直接選挙制にかえるといいうのが当面の目的）が、「一千万人改憲署名運動」として大衆的に開始され、全人民政治闘争化してきている。三月十一日には新韓民主党がソウル市内で二千人の街頭デモを行った。新学期がはじまつた大学でも改憲署名が開始され、ソウル大の学内デモでは「憲法撤廃」のスローガンが叫ばれた。

韓国における反体制運動は、八〇年五月の光州蜂起を歴史的画期として大きな転換をはじめ、反米の旗が公然とかかげられるとともに、その内部にプロレタリア階級に依拠し、暴力革命と前衛組織の建設を指向しようとする先進的部分を生みだしてきた。しかし韓国の労働者人民の解放を、日米帝による新植民地主義支配の打倒、韓国ブルジョアジーと資本主義の打倒に求める革命派はいまだ少数派である。革命的成長によつて、反独裁闘争を金泳三、金大中氏らの親米・反全斗煥の枠内に固定化される危険から救い、反帝民族解放—社会主義革命へと発展させていくこと

とが、情勢の発展のなかで本格的に要求されはじめている。

中米ニカラグアでは、米帝に支援された反革命ゲリラとのし烈な戦闘がつづいている。米帝・レーガンはチャモロニアニカラグア反革命ゲリラ指導者と直接会見し、ニカラグア革命政権とFSLN（サンディニスタ民族解放戦線）を壊滅するために、一層の支援を約束した。米帝はニカラグアへの直接的な軍事進攻の機会さうかがついている。

革命は防衛されねばならない。ニカラグア人民は彼らがたたかいとった革命を米帝の破壊攻撃から守りぬくため、最後の血の一滴までたたかうという決意を固めている。ニカラグア革命を防衛すること、共産主義革命への前進に連帶すること、これは国際プロレタリアートの義務である。

世界の各地で前進をつづける反帝民族解放闘争は、われわれに次のことを教えている。第一に、フィリピンや韓国の事態がわれわれたたかいが急速な広がりをみせていている。新韓民主党と民主化推進協議会を中心とした改憲運動（大統領選挙を直接選挙制にかえるといいうのが当面の目的）が、「一千万人改憲署名運動」として大衆的に開始され、全人民政治闘争化してきている。三月十一日には新韓民主党がソウル市内で二千人の街頭デモを行った。新学期がはじまつた大学でも改憲署名が開始され、ソウル大の学内デモでは「憲法撤廃」のスローガンが叫ばれた。

韓国における反体制運動は、八〇年五月の光州蜂起を歴史的画期として大きな転換をはじめ、反米の旗が公然とかかげられるとともに、その内部にプロレタリア階級に依拠し、暴力革命と前衛組織の建設を指向しようとする先進的部分を生みだしてきた。しかし韓国の労働者人民の解放を、日米帝による新植民地主義支配の打倒、韓国ブルジョアジーと資本主義の打倒に求める革命派はいまだ少数派である。革命的成長によつて、反独裁闘争を金泳三、金大中氏らの親米・反全斗煥の枠内に固定化される危険から救い、反帝民族解放—社会主義革命へと発展させていくこと



新国民党を求めてソウル市内をデモする

## ● 東京サミット

### 2 国際階級闘争の鎮圧めざす東京サミット

きたる五月四日から六日にかけて、第一回先進国首脳会議（サミット）が東京赤坂の迎賓館においておこなわれる。東京サミットにはアメリカ・日本・フランス・西ドイツ・イギリス・イタリア・カナダの七ヶ国首脳とEC（ヨーロッパ共同体）代表が参加する予定である。われわれの眼前でおこなわれるこの反革命会談を粉碎し、全世界の反帝民族解放闘争、反帝民族解放—社会主義革命との国際主義的連帯をかかげたプロレタリア政治闘争の発展を切りひらくために全力で決起しなければならない。

第三に、ニカラグア革命が現在強要されてゐる現実がもつとも端的に示しているように、反帝民族解放闘争のいつたんの勝利は決して革命の安定を意味せず、帝国主義の包囲と反革命干渉はむしろ数倍強化されるのであり、革命を防衛しこれを発展させるためには、国際プロレタリアートの緊密な結合が必要である、その再建が要求されているということである。

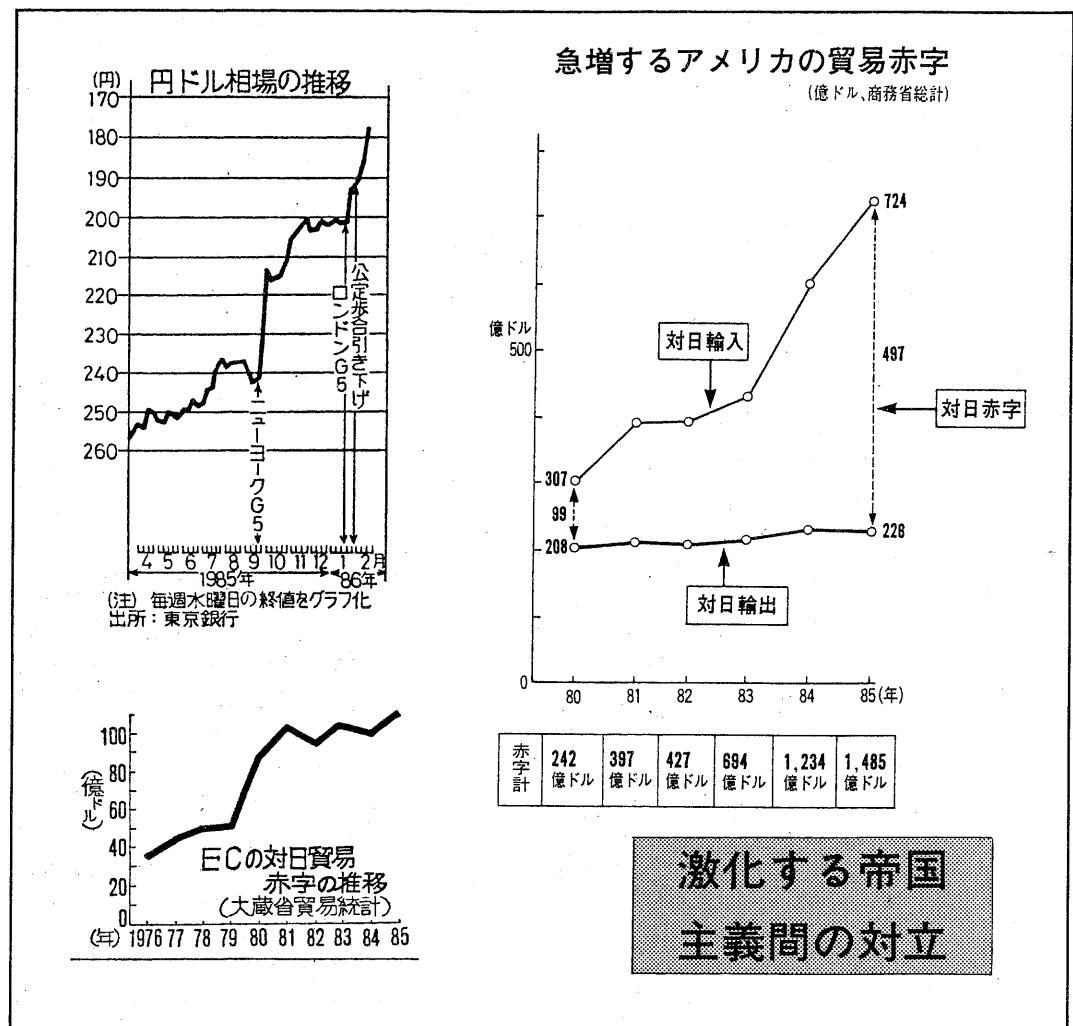
反帝民族解放闘争の新たなる高揚にたいし、帝国主義が激しい巻き返しに転じようとしているいま（東京サミットの目的のひとつはまさにこの点にある）、そしてわが日本帝国主義が国際国家日本の名のもとに、反帝民族解放闘争への直接的敵対に乗りだそうとする以上（天皇制が台頭する根柢もここにある）、以上の見地に立つて国際連帯闘争の強力な推進をはからねばならない。

第三に、ニカラグア革命が現在強要されてゐる現実がもつとも端的に示しているように、反帝民族解放闘争のいつたんの勝利は決して革命の安定を意味せず、帝国主義の包囲と反革命干渉はむしろ数倍強化されるのであり、革命を防衛しこれを発展させるためには、国際プロレタリアートの緊密な結合が必要である、その再建が要求されているということである。

反帝民族解放闘争の新たなる高揚にたいし、帝国主義が激しい巻き返しに転じようとしているいま（東京サミットの目的のひとつはまさにこの点にある）、そしてわが日本帝国主義が国際国家日本の名のもとに、反帝民族解放闘争への直接的敵対に乗りだそうとする以上（天皇制が台頭する根柢もここにある）、以上の見地に立つて国際連帯闘争の強力な推進をはからねばならない。

第三に、ニカラグア革命が現在強要されてゐる現実がもつとも端的に示しているように、反帝民族解放闘争のいつたんの勝利は決して革命の安定を意味せず、帝国主義の包囲と反革命干渉はむしろ数倍強化されるのであり、革命を防衛しこれを発展させるためには、国際プロレタリアートの緊密な結合が必要である、その再建が要求されているということである。

反帝民族解放闘争の新たなる高揚にたいし、帝国主義が激しい巻き返しに転じようとしているいま（東京サミットの目的のひとつはまさにこの点にある）、そしてわが日本帝国主義が国際国家日本の名のもとに、反帝民族解放闘争への直接的敵対に乗りだそうとする以上（天皇制が台頭する根柢もここにある）、以上の見地に立つて国際連帯闘争の強力な推進をはからねばならない。



ことは、激化する帝国主義間の経済的対立が破局的事態にいたらないように、成立しては崩壊する協定をつくりつづけることだけである。他方、この十年間のあいだに資本主義の世界的危機は新植民地主義支配下の諸国における階級矛盾と階級対立を激化させた。中南米・アジア・アフリカ・中東における反帝民族解放闘争の爆發的高揚が生みだされ、ニカラグアやフィリピンの情勢が示すように、反帝民族解放闘争と共産主義革命の結合が実践的に課題になりつつある。この国際的な階級闘争の前進に対峙し、帝国主義の世界支配を何としても防衛すること、そのための協議を第一義の課題とするものへとサミットの性格は変化してきたのである。

中曾根政権は、今回の東京サミットの目的を「世界経済の安定的発展にむけた協力を話し合うとともに、世界の平和と安定にむけ忌憚のない意見交換をおこなう」ことにあるとしている。東京サミットの議題は公表されていないが、一月中曾根のカナダ訪問、安倍外相の訪米・訪欧時の各国首脳との会談をおおして、①対ソ核軍縮問題②貿易摩擦・通貨問題③発展途上国の累積債務問題④地域紛争とテロへの対策が議題になると伝えられる。そこには帝国主義列強がその世界支配を維持するために直面している問題が、ブルジョアジーの言葉ではあっても凝縮して表現さ

れている。このなかに示される東京サミットの反動的反革命的目的は次のものである。

## 対ソ軍事対決の強化

第一に、SDIを中心とする米帝の対ソ核戦略構想に各帝国主義国首脳が支持と参加を表明することをもって、年内にも予定される第二回米ソ首脳会談にむけた帝国主義国の足並みをそろえ、団結を誇示しようとすることである。

昨年十一月一九日から二〇日にかけてジュネーブで開かれた米ソ首脳会談は、核軍縮問題を中心に協議をおこなつたが、何の実質的な合意も生みだすことなく終つた。米ソ首脳会談が開催された背景は、レーガン政権登場以降のすさまじいまでの核軍拡が、米ソ両国の経済を破滅的な状態においやつたことにあり。米帝は戦略核・戦域核の領域での米ソ核軍拡を一定の枠に抑制しつつ、SDI計画を軸に対ソ核戦略上の優位性を確保することに当面する目標を設定している。そして、米帝一国では支えきれぬSDI計画に他帝国主義をひきいれようとしている。昨年の米ソ首脳会談前の緊急サミットでは、帝国主義各国のあいだでの十分な一致がつくれなかつた。今回サミットでは、第二回の米ソ首脳会談に備えて、SDI計画を軸にした米帝の核戦略構想への各帝国主義の参加と賛同をとりつけていくことに目的があるのである。

サミットの議題の一つである「核軍縮」とは以上のように、米ソ首脳会談という交渉の到来を意味するものである。

それはまず、この数年間の小康状態を支えた米帝の財政赤字と貿易収支の赤字が破局的なまでの巨額に達し、これ以上この状態を継続できなくなつたことである。

米帝・レーガン政権はそもそも減税による民間活力の活性化による景気回復と、「小さな政府」の実現による財政赤字の解消をかけて出発した。しかし「強いアメリカ」をかけた大軍拡がこのすべてをおしつぶした。すなわち、大軍拡政策は財政赤字を急激に拡大し、一九八六年会計年度（八五年一〇月から八六年九月）には、二二〇五億ドルという巨額に達すると予測されている。また、米帝はこの赤字を外国からの資金の導入によってまかなうために高金利政策をとり、それが異常なまでのドル高をひきおこした。それは米帝の輸出競争力を奪い、米国内産業に深刻な打撃を与えた。

過剰生産による不況にあえいでいた日帝・西欧帝は、このドル高をとらえてアメリカ国内市場をねらつた風のような輸出攻勢をかけた。とりわけ、「減量經營」なる徹底した合理化をすすめてきた日帝の対米輸出は爆発的伸びを示した。こうして世界資本主義は米帝の巨額の財政赤字、貿易赤字とひきかえに、第二次石油危機以降の不況からの一一定の回復を実現したのである。

しかしこのあいだに米帝の貿易収支赤字は、レーガン政権が誕生した八一年の三九六億ドル（そのうち対日赤字一二二億ドル）から八年の一四八五億ドル（同四九七億ドル）へとまさに雪だるまのように増加した。そして貿易収支が巨額の赤字にもかかわらずドル高が維持され、それが一層赤字を拡大するといふ悪循環がつづいた。こうして八五年には、米帝はついに純債務国にまで転落したのである。

このような構造が一時的な資本主義の危機の緩和に役立つたとしても、それは長期的に維持できるものでないことは明らかである。アメリカにおいて保護貿易主義が台頭し、米帝と日帝のあいだの経済的対立は急速に深刻

場をも駆使しつつ、ソ連にたいする核戦略上の優位性をあくまで確保しようとするものにはかならない。

## 資本主義の危機回避

サミットの目的の第二は、日帝・米帝・西欧帝のあいだの深刻な経済的対立を調整し、破局的事態にいたることを回避することにある。その焦点は、各帝国主義間の極端な貿易不均衡と通貨問題にある。

七〇年代の第一次、第二次石油危機を引き金とした資本主義の世界的危機はこの数年間小康状態を維持してきたが、ふたたび深刻な不況局面に向かおうとしている。このことは、次のように深刻で構造的な資本主義の危機の到来を意味するものである。

それはまず、この数年間の小康状態を支えた米帝の財政赤字と貿易収支の赤字が破局的なまでの巨額に達し、これ以上この状態を継続できなくなつたことである。

米帝・レーガン政権はそもそも減税による民間活力の活性化による景気回復と、「小さな政府」の実現による財政赤字の解消をかけて出発した。しかし「強いアメリカ」をかけた大軍拡がこのすべてをおしつぶした。すなわち、大軍拡政策は財政赤字を急激に拡大し、一九八六年会計年度（八五年一〇月から八六年九月）には、二二〇五億ドルという巨額に達すると予測されている。また、米帝はこの赤字を外国からの資金の導入によってまかなうために高金利政策をとり、それが異常なまでのドル高をひきおこした。それは米帝の輸出競争力を奪い、米国内産業に深刻な打撃を与えた。

過剰生産による不況にあえいでいた日帝・西欧帝は、このドル高をとらえてアメリカ国内市場をねらつた風のような輸出攻勢をかけた。とりわけ、「減量經營」なる徹底した合理化をすすめてきた日帝の対米輸出は爆発的伸びを示した。こうして世界資本主義は米帝の巨額の財政赤字、貿易赤字とひきかえに、第二次石油危機以降の不況からの一一定の回復を実現したのである。

化した。さらに日帝・西欧帝にとつても、世界最大の資本主義であるアメリカ資本主義を壊滅的事態においやることは長期的には危険なことであった。それゆえ米帝と日帝・欧州帝はたがいに激しく対立しながらも、この事態を開けるための協議を余儀なくされたのである。

昨八五年九月二二日、米・日・西独・仏・英の五ヶ国蔵相・中央銀行総裁会議（G5）が開かれた。会議はドル高が米国の未償有の国際収支赤字と保護貿易主義を生みだしたことを見出し、ドル高の抑制を決定した。

以降半年のあいだに、一ドル二四〇～二五〇円の水準であったものが一ドル一七〇円台にまでドル安・円高がすすめられた。また、米帝と日帝・西欧帝間の貿易不均衡是正のための協議がつみ重ねられた。

だがこれらの方策は、資本主義の危機の打開につながるものではない。米帝の財政赤字の根源である大軍拡は、対ソ軍事対抗上また反帝民族解放闘争との対抗上変更不可能なものである。さらにこれらの方策は、日帝・西欧帝の国内産業に深刻な打撃を与える。米帝の危機を日帝・西欧帝に拡大する結果しか生まれないであろう。

資本主義の危機を構造化させているまでの特徴は、原油・銅・錫・コーヒー・砂糖などの第一次産品が八三年ごろから暴落し、これららの産品の価格を保持してきた国际カルテルが崩壊状態におちいっていることである。この事態は、第一次産品の輸出に頼ってきた東南アジア・アフリカ・中南米諸国の経済的危機を決定的なものとした。このような事を招いた原因は、帝国主義各國が石油危機以降、省資源型の産業構造へと転換していくこと、第一次産品輸出国が膨大な对外債務の返済と石油危機からの脱却のために生産を拡大しつづけたことが結びついた過剰生産であり、きわめて構造的なものである。

このように、世界資本主義はふたたび過剰生産恐慌への転落という傾向をきわめて顕著に示しはじめている。東京サミットでは貿易不均衡の是正と通貨問題を軸に、このような資本主義の危機を開けるための協議がおこなわれるであろう。しかしそれがいささかも根本的な解決を約束するものではないことは明らかである。

## 累積債務問題の協議

サミットの目的の第三は、いわゆる発展途上の累積債務問題の協議にある。ブラジル、メキシコ、フィリピンなど巨額の債務をかかえる国の返済期が八七年ごろからふたたび訪れる。しかし、世界資本主義の慢性的の危機、とりわけ前述の第一次産品の暴落のなかで、これら諸国の経済は一層危機的状態を迎える。しかし、世界資本主義の慢性的の危機、とりわけ前述の第一次産品の暴落のなかで、これら諸国の経済は一層危機的状態を迎える。しかしこれら諸国はほとんど存在しない。それはこれら諸国の危機にとどま

開発途上国外債務  
(単位 10億ドル)

①	アラジル	102.9
②	メキシコ	96.5
③	アルゼンチン	49.3
④	ラバニア	31.1
⑤	ペルー	26.5
⑥	エチオピア	21.1
⑦	ゴーランド	21.0
⑧	スリランカ	19.0
⑨	ラバニア	13.9
⑩	エクアドル	7.6

(出所) US News & World Report

らす、世界恐慌を爆発させる火薬のようなものである。さらに、一国の生産と輸出のほどんどが对外債務の返済にむけられねばならぬという状態は、これら諸国の人々の貧困と階級対立の激化を不可避免に生みださざるえない。帝国主義各國はこの危険を感じるがゆえに、サミットの議題の一つとして累積債務問題をかかげているのである。

しかし、帝国主義各國の側にこの事態を乘りきる方策があみだせるわけではない。そもそも帝国主義各國がアジア・アフリカ・中南米諸國に際限なく金を貸しつけ、その金で帝國主義諸國の製品を購入させ、膨大な利益をあげてきたことがこの事態を生みだしてきた原因であり、それはすでに帝國主義諸國を支える構造にまでなっているからである。そして危機を深める帝國主義は、もはや長期にわたる債務返済猶余をおこなう余裕を失っているからである。

## 民族解放闘争の圧殺

そしてサミットの目的の第四は、全世界の階級闘争、とりわけ反帝民族解放闘争の全世界的な高揚を鎮圧していくための反革命的協議をおこなうことにある。

「地域紛争とテロへの対策」を最重要議題の一つとして公然とかかげた東京サミットほど、反帝民族解放闘争への対策を重視したサミットはなかつたといえる。東京サミットでは、少なくとも①ニカラグア革命を破壊し共産主義革命への発展を阻止するために、ニカラグアへの経済封鎖と軍事的介入などが協議の焦点になることは確実である。

米帝は「（米ソ間の）軍備管理は平和の代わりにならない。米国は自由のためにたたかいい、自由をかちとる権利を物心両面の援助で支持するだろう。アフガニスタンで、アングラ、カンボジアで、そしてニカラグアで」「これらの紛争はすべて各地域内の問題に根本原因があるが、同時に共通の性格を持っている。それは外部から強要されたイデオロギーによって国家を分断し、権力を握ったその日から自国民に敵対する政権を樹立した結果であ

る」と主張する。米帝をはじめとする帝国主義各國は、ニカラグア・フィリピンをはじめとする全世界の反帝民族解放闘争が、帝國主義の世界支配を根底から搖るがすのみならず、共産主義革命との結合にむかうことに心底恐れをなし、反革命ゲリラへの支援、反共民族ブルジョアジー内の政権交代への封殺、軍事的威圧、直接の侵略反革命戦争の発動などあらゆる手段を用いた政治的軍事的介入を強化しようとしているのである。

東京サミットはこのように、全世界の反帝民族解放闘争、共産主義革命の鎮圧のための方策を協議し、帝國主義間の侵略反革命同盟の政治的軍事的強化をねらう許しがたい反革命會議である。

## ●日本帝国主義と東京サミット

日本帝国主義にとって東京サミットのもう一つ位置はきわめて大きい。

日帝は東京サミットをとおして、米帝との同盟関係を強化しつつ、世界資本主義体制を支える中軸へとみずからをおしあげようとしている。戦後世界資本主義の牽引者であった

米帝はいまや債務国家に転落し、他の帝國主義諸國に応分の役割分担を強力に要求するにまでいたっている。他方、激しさをます帝国主義間の市場再分割戦において、貿易摩擦問題に示されるように、日帝は米帝・EC諸帝との抗争のなかで巨大な資本蓄積をすすめた。

米帝の相対的低落とあいまって、日帝の国際的地位は急速に浮上した。これを背景にして日帝は東京サミットにおいて、米帝・EC諸帝とならぶ帝國主義強国として登場したこと全世界上に宣言しようとしているのである。

中曾根は本年一月の施政方針演説で「国際社会において名譽ある地位を占めようとする眞日帝は東京サミットにおいて、米帝・EC諸帝とならぶ帝國主義強国として登場したこと全世界上に宣言しようとしているのである。」と主張したが、それは東京サミットを前にした日本ブルジョアジーの決意表明にはかならなかつた。

「国際國家日本」の実現をうちだした日帝は「世界の憲兵」たる米帝のパートナーとして、全世界の「紛争地域」への経済的政治的（部分的には軍事的）介入に乗りだそうとしている。フィリピン新政権誕生にさいして中曾根は「米国や自由主義陣営が心配しているのが課題」と放言したが、これは米帝のフィリピンなど東アジア諸国における支配力が低下していく情況下で、この反革命的補完をめざそうとする日帝の意図のあらわれである。コロンビア、ホンジュラスなど中米諸国への経済援助、韓国、フィリピンなど東アジアの軍事政権へのテコ入れなど、このかん日帝は米帝の肩がわりを経済的政治的に強めている。

東京サミットは国際反革命国家として日帝が登場していく歴史的転換点となるであろう。

日帝・中曾根政権のもとで自衛隊海外派兵策動をふくむ大軍拡攻撃が進行している。名づけられた「平和構築」は、実際には世界の平和を脅かすものである。

実ともの帝国主義軍隊の創出をめざす日帝は昨年の中期防衛力整備計画の閣議決定をテコにGNP一%枠を実質撤廃し、軍拡のために戦後的制約をとりはらい、他方、国際緊急援助隊の創設をうちだすなど海外派兵の準備さえ開始している。

また中央指揮所の実動とともに、安全保険会議なる「大本營」の設置が計画され、遂行と国内治安弾圧の作戦・司令部が完成されようとしている。昨年の行革審答申で明ら

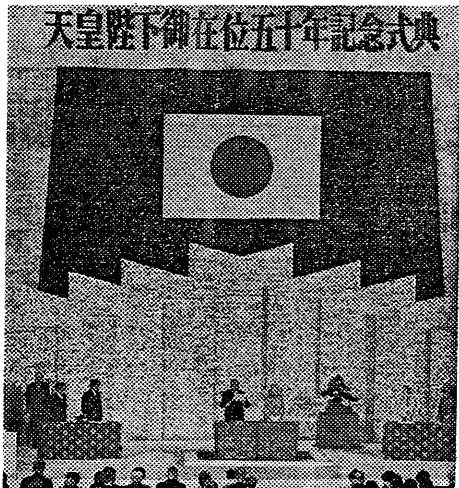
# 侵略への國 ねらう天皇

日本プロレタリアートは血ぬられた戦犯天皇ヒロヒトの在位六〇年を祝うことなど絶対にできない。

# 侵略への国民統合を ねらう天皇60年式典

進む草の根奉祝運動

皇ヒロヒトの在位六〇年を祝うことなど絶対にできない。



50年式典に出席した天皇(76年11月10日)

かになつたように、現在の国防会議を国家公  
安委員長の加わった安全保謢会議に再編し、  
国内外の階級闘争の高揚という「重大緊急事  
態」に対処すべく、内閣官房に外政調査室、  
内政調査室を設置するなど、反革命中枢機構  
の強化がはかられている。

侵略反革命軍隊の強化とむすびついて国内  
治安弾圧体制がさまざまな方面・分野から強  
化されている。天皇式典、東京サミット時に  
おいてはそれは文字どうり戒厳体制として具  
体化されようとしている。

史上最大級の弾圧体制は、東京サミットを  
国際反革命国家への飛躍台と位置づける日帝  
の意気込みを示すものであり、プロレタリア  
ートの政治決起にたいする真正面からの挑戦  
と虐殺の攻撃が、いよいよ本格的に開始され  
たことを意味している。

ものがある。北海道一道庁等の支援を受けて  
奉祝道民大会が計画されている。東京一都主  
催の式典やパレードの実施を求める運動がお  
こなわれている。富山一すでに県民大会がも  
たれ本年には奉祝行事も予定されている。岐  
阜一記念公園や顕彰碑の建設がすすんでいる  
京都一知事を顧問として奉祝委が結成され本  
年十一月に奉祝パレードと式典が予定されて  
いる。大阪一植樹祭とパレードが準備されて  
いる(後述)。山口一昨年十一月に下関、宇  
部に記念碑が建てられ本年も十一月に奉祝式  
典とパレードが予定されている。福岡一県主  
催の奉祝行事を求める署名運動がおこなわれ  
て性格づけられているのである(カッコ内は  
式典が準備されている。熊本一知事を顧問と  
して約五〇〇の団体からなる奉祝会が結成さ  
れ式典が計画されている。

このような都道府県レベルの動きは、市町  
村レベルでの奉祝行事の「起爆剤」として位  
置づけられ、「国民総参加の奉祝運動」とし  
て性格づけられているのである(カッコ内は  
式典が準備されている。熊本一知事を顧問と  
して約五〇〇の団体からなる奉祝会が結成さ  
れ式典が計画されている)。

なお大阪では五月十一日に天皇列席のもと  
第三七回全国植樹祭が実施されようとしてい  
る。堺・大仙公園へ「天皇陛下御在位五〇年  
記念公園」を中心として開かれる植樹祭は  
関西の政財界による奉祝実行委の動きと一体  
となつて、大規模な奉祝運動の一環として組  
織される。「地球には緑の服がよく似合う」  
というスローガンのもと各種の記念行事が四  
月から十月にかけて予定され、これらをとお  
した住民の動員がすすめられるとともに、他  
方で天皇来阪時には沿道出迎え十万人、御堂  
筋パレード二万人という計画が準備され、全  
体として地域のすみずみにまで根をはつた強  
力な奉祝運動へとまとめられようとしている。

## 六〇年式典のねらい

こうした全国各地の無数の奉祝行事の頂点に位置するものとして、四・二九の六〇年式典は準備されているのである。

一大国家的行事として强行されようとする  
六〇年式典に、ブルジョアジーはどのように

それは第一に、侵略とファシズムに色どられた昭和史を全面的に賛美・肯定し、天皇の

戦争責任問題を清算し、天皇への敬愛感情をかきたてながら、新たな侵略反革命戦争への人民の動員をはらう二二二九。

ヨアジーの側はむしろ回避してきた天皇の戦とりわけこれまで正面切った論争をブルジ

聖断キャンペーんをつうじて一挙に清算してしまふことが強くねらわれてゐる。三月八日

の要約でもある。「陛下自身は平和主義者で  
いる。これはこのかんの御聖断キャンペー

戦争回避に努めた、これを戦争に持っていくのは軍部の開戦派の連中だ。終戦は陛下の意に沿へる。ここ些くはやがて、三四〇、四一、

傷ついた人たちを慰さめられた。そういう天皇の在位六〇年を祝おうというのは自然の感

ねらいの第二は天皇の元首化であり、改憲

全国奉祝運動の突撃隊となつた「日本を守る国民會議」の議長である加賀俊一は、「日

本が他国と本質的に異なる点を考えますと、それは日本にしかない国体というものがありま。

的にも、元首として行動しておられ、それに  
対して国民も外国筋もいささかの疑問もいだ

御在位六〇年」とのべ、象徴天皇制を否定したうえで、すでに天皇は国家元首であると

聞言であるのである。また同じ国民会議の福島  
廣之（明治神宮権宮司）は、「御在位六〇年  
奉祝運動の展望」と題する文章のなかで、「つ

が国の伝統に則り政教の基本として定められた帝国憲法と教育勅語の百年という年が目前

憲法原理の復権、すなわち戦後憲法の否定と改憲という流れのなかに位置づけようとして

にせよ、核心的な部分はブルジョアジーの意図の代弁とみることができる。

第三のわれらにはアーチスト運動を育成し  
他方で革命的左翼と戦闘的労働運動・大衆運  
動への導入を強化して、ここにこころある。

「国民総参加の奉祝運動」の主張にみられる  
ように、学校、P.T.A.、町内会から企業、労  
働組合、各種アマチュアサークルなど多岐に

わたる草の根組織化をつうじてもくろまれて、いることをみておかねばならない。天皇制に疑問をもつもの、反対するもの、ブルジョアジーの野望とたたかおうとするもののすべてを社会の諸組織と地域から排除しようとする動きが強まっている。中曾根は先の国会答弁において「この国民の大多数の考え方（天皇は平和主義者である等）にあえて異を立てる者は国家転覆という気持ちを持っている人では、とすら私は疑う」とまでいい放っている。

## 式典粉碎闘争の任務

天皇制を正面に立てた動きは自白押しである。六〇年式典は今後数年間にわたる日本階級闘争の暴力的弾圧と変質のため、新たな攻撃の突破口となるだろう。今秋皇太子訪韓、八七年秋の天皇訪沖（沖縄国体）から、Xデー、改憲へとつづく攻撃は、日本プロレタリアート人民に大きな飛躍を要求する。

われわれは以下四点の飛躍のための課題と任務をかかげて四・二九闘争をたたかう。

第一はブルジョアジーの攻撃の全面性・全国性と対決する、プロレタリアートの側の全面的・全国的な反撃を組織することである。つまるところ天皇制との闘争はブルジョア階級支配とのたたかいであり、式典や奉祝運動をめぐって生起するであろう人民内部の流動と分解をここにひき寄せ、同時にできるかぎり大衆的な政治的反撃が全国各地でかちとらねばならない。

第二は象徴天皇制に屈服することによって、プロレタリアート人民を武装解除しつづけた社共の誤りとたたかうことである。社会党は六〇年式典にさいして大きく動搖し、下部からのつきあげで式典不参加を表明はしていなかったからである。

## 政治闘争の大前進を

われわれはこの数年間、プロレタリア政治闘争の組織化をすべての労働者・学生諸君に提起しつづけてきた。プロレタリア政治闘争は共産主義革命の主体であるプロレタリアートを、武装蜂起とプロレタリア独裁権力の樹立をになう革命的階級に形成していくための基礎は、大衆的プロレタリア政治統一戦線の

# 4 天皇・サミットに総力決起せよ

全国のたたかう労働者人民諸君！

共産同（全国委）は天皇・サミット闘争にすべての諸君がわれわれとともに決起し、今春のいっさいの政治過程をつらぬいて、国際主義をかけたプロレタリア政治闘争の巨大事高揚をつくりだすためにたたかうことを呼びかける。

形成をどおりしてできるだけ多くのプロレタリアートを政治闘争に決起させ、その内部から武装蜂起とプロ独になら革命的階級への長期にわたる前進をつくりだしていくたたかいにある。われわれは一地方的であるとはい、階級的労働組合の共闘を中心とする政治的統一戦線の形成に成功した。労働組合の指導権をもたず厚い社共の壁にはばまれることによつて、これまで新左翼諸党派がなしえなかつたこのもつとも基礎的なプロレタリア政治闘争の組織化を唯一切りひらいてきたのである。われわれは今春六月、国家秘密法粉碎、靖国公式参挙阻止をかかげ、全国で大衆的プロレタリア政治統一戦線建設を前進させるつもりである。

同時にわれわれはこの大衆的基礎のうえに、党と労働者政治委員会が直接的に呼びかける

プロレタリア政治闘争の組織化に全力で踏み

したがつて第三は、社共のくびきからプロレタリアート人民を解き放ち、何よりもブルジョア階級支配と國家権力の打倒をめぐるプロレタリア政治闘争として、反天皇制闘争を組織することである。これを拒否するさまざま思想的傾向（たとえば「内なる天皇制との闘争」論）とは、われわれはみずからを厳しく峻別しなければならない。

そして第四は、天皇制攻撃と正面対決するレーニン主義前衛党の建設がかちとられなければならない。日本プロレタリアートは戦前、天皇制を軸にしたファシズムの前に大敗北を喫し、翼賛運動のもとに組織され、アジア侵略にかりだされるという恥ずべき歴史を体験した。これは共産主義運動の敗北であり、前衛党建設の敗北であつた。この敗北の歴史は克服されねばならない。天皇制攻撃とのたたかいの烈火のなかで、この最後の勝利を保障するマルクス・レーニン主義で武装した鉄のような革命党建設の前進を必ずや実現せねばならない。

## 粉碎闘争の任務

われわれはこのようなプロレタリア政治闘争の飛躍をかけて、五・四東京サミット闘争、四・二九をはじめとする天皇在位六〇年式典組織することである。これを拒否するさまざま思想的傾向（たとえば「内なる天皇制との闘争」論）とは、われわれはみずからを厳しく峻別しなければならない。

われわれはこのようなプロレタリア政治闘争の飛躍をかけて、五・四東京サミット闘争、四・二九をはじめとする天皇在位六〇年式典組織することである。

われわれはこのようなプロレタリア政治闘争の飛躍をかけて、五・四東京サミット闘争、四・二九をはじめとする天皇在位六〇年式典組織することである。これを拒否するさまざま思想的傾向（たとえば「内なる天皇制との闘争」論）とは、われわれはみずからを厳しく峻別しなければならない。

## ● 東京サミット

東京サミットは第二章で提起したように、帝國主義間の強盗的抗争を調整し、破局的事態にいたることを回避すること②SDI計画への各国帝国主義の支持と参加をうちだし、第二回米ソ首脳会談にむけた帝国主義各国の団結を誇示すること、そして何よりもわれわれが注目すべきものとして、③全世界の階級闘争とりわけ反帝民族解放闘争を鎮圧し、共産主義革命との結合を阻止するための侵略反革命同盟の強化を目的とするものである。そして日帝にとって東京サミットは、帝国主義列強内での米帝に次ぐ盟主として自己をおしだし、アジア諸国を新植民地主義支配下におく国際反革命国家として一層大きな役割をひきうけるものとなる。それは必ず国内における戦争とファシズムの準備をさらに加速するものとなるであろう。

眼前でおこなわれるこの帝国主義列強の反革命会議にたいして、日本プロレタリアートはどうのような態度をとるべきなのか。全世界のプロレタリア人民が、とりわけいまこの時もニカラグアにおける反革命ゲリラとの戦闘の最前線で、エルサルバドルやフィリピンのジャンクルで、韓国など軍事独裁政権の圧政のもとで、アパルトヘイト下の南アフリカの街頭で、民族の解放と共産主義革命の勝利のために血を流してたたかいつづけるプロレタリア人民が、日本プロレタリアートの態度を注視しているといつても過言ではない。

## 国際主義を復権せよ

われわれは東京サミット粉碎闘争を、第一に全世界の反帝民族解放―社会主義革命と連帶するプロレタリア国際主義を、わが国の階級闘争のなかに復権させていくたたかいとし

て組織しなければならない。

東京サミット粉碎闘争を放棄し、排外主義へと転落しつづける社共は論外としても、新左翼諸党派はこの点についてどのような態度を示しているだろうか。

米争闘戦と米ソ核軍拡の激化」による戦争の危機の到来とのみみて、中曾根政権の実力打倒を唱え、反帝民族解放―社会主義革命への民主主義者が世界革命への絶望者であることがあざやかに示すものである。彼らは世界各地のプロレタリア人民のたたかい一般は評価するが、誤れる反帝反スターリニズムを領導する共産主義運動はすべてスター・リン主義に汚染された打倒すべき敵とみる。こうして彼らは国際階級闘争と共産主義運動のなかに、結合すべきいかなるべきいかななる対象をもみいだすことができず、わが国の革命を国際階級闘争のなかに位置づけ、他国の革命と結びつけていくことができない救いがないがたい一国主義に転落している。

右翼日和見主義者たちは東京サミット闘争を、民族解放闘争と連帶する国際連帯闘争だと口々にいう。しかしその内容たるや彼らのうち相対的に左の部分ですら、「第三世界人民は勝利の進撃をつけ帝国主義は没落している。第三世界人民のようにたたかって日帝を打倒する」ことが国際主義だという。何と平板な国際主義だろうか。彼らは反帝民族解放闘争が共産主義革命との結合に逢着していることを何らともえられず、したがつてこの逢着問題を突破していくための国際共産主義運動上の課題も、わが国において樹立すべきプロ独権力の任務も何ら提起できない。

東京サミット闘争をとおしたプロレタリア国際主義復権の課題は、これらの部分と分岐した国際主義の路線のもとに、先進的労働者・学生の断固たる結集を実現していくことに

多くの新左翼諸党派のもつとも基礎的な誤りは、資本主義批判とプロレタリアートの世界的解放にむけた階級闘争の発展という見地に国際主義を立脚させるのではなく、国際主義の内容を反帝民族解放闘争の反帝的性格にたいする賛美と、自国帝国主義との闘争にのみ一面化してしまうことにある。自国帝国主義との闘争を否定する社共への部分的批判にはなっても、このかぎりでは小ブル国際連帯運動の域をでない。

プロレタリアートの国際主義は、いかなる国のプロレタリアートも賃金奴隸であり、ブルジョアジーを打倒し共産主義社会を建設することをとおしてのみ解放されるという共通の運命を背負つていてこと、そしてプロレタリアートの解放は世界的にしかありえず、プロレタリアートは国際的統一と共同行動をつくりだしていくかねばならないこと——資本主

民族への原則的批判にもとづくこのような確信に立脚するものである。全世界の民族をひとにぎりの抑圧民族と圧倒的多数の被抑圧民族に分裂させた帝国主義の時代の到来は、帝国主義本国（プロレタリアート）に、被抑圧民族（義國）（プロレタリアートと被抑圧民族（殖民地支配下諸国））プロレタリアートを統一し、全世界におけるプロレタリアートの解放における單一のたたかいへと、各国の階級闘争を結合する目的のためである。

国際階級闘争の新たな流動は、一章において提起したように現代過渡期世界における全世界のプロレタリアートの解放のために、わが国をふくむ帝国主義本国（プロレタリアート）の国際主義の実践的任務を次のように確立していくことを要請している。

その第一は、反帝民族解放闘争と共産主義革命の結合にむけて、国際主義的連帯と援助を集中していくことである。このかんのフィリピンやニカラグアの激動が示すように、帝国主義は新植民地主義支配下の諸国における反帝民族解放闘争や反独裁闘争が共産主義と結合し、国境を越えて波及することを何よりも恐れ、帝国主義各国の共同した政治的・経済的・軍事的介入をくりかえしてきた。反帝民族解放闘争内のプロレタリアートがこの攻撃とたたかい、共産主義革命へと前進するためには、全世界のプロレタリアートの国際主義的連帯と援助を集中することが不可欠なのである。

その第二は、スターリン主義との国際党派闘争をとおして、国際階級闘争の指令部となる新たなインター（共産主義世界党）を創建していく歴史的事業を前進させていくことである。プロレタリアートの国際連帯が大規模に組織されねばならないその時に世界党はなく、スターリン主義によって投げ捨てられたままである。中国・ベトナム戦争以降の国際共産主義運動の混迷がいまこそうち破られ、新たなインター創建の歴史的事業への全世界の共産主義者の結集が必要となっている。

第三には、自国帝国主義の侵略反革命、戦争とファシズムの準備とたたかい、自国帝を打倒し、世界プロ独立の一部へと発展するプロレタリア独裁権力を樹立することである。帝みならず、世界革命と世界プロ独立にむけた国際階級闘争にプロレタリア人民を組織しつづけるプロ独立権力の樹立をもつて、はじめてわれわれはプロレタリアートの世界的解放にむけたみずから責務をはたすことができる。

政治共闘を首都におしだしていくたたかいとして組織しなければならない。

八三年の三里塚闘争の分裂以降、現代急進民主主義と右翼日和見主義はともに急速に、プロレタリア政治闘争の阻害物として転落してきた。現代急進民主主義は戦闘団主義ブランキズムに純化し、右翼日和見主義の多くは統一戦線党、協議会党を展望する解党主義「建党協」に身を寄せ、市民運動を前面に立てた市民主義統一戦線を横行させてきた。これらはいずれも労働運動の流動に対応しえず、もつとも広範なプロレタリアートをプロレタリア政治要求へと前進させつづけるための大衆的プロレタリア政治統一戦線の形成に対立し、階級闘争の進路をさし示しプロレタリア政治要求への結集を正面から提起するプロレタリア政治闘争（革命的政治闘争）の組織化を否定するものである。諸党派はこれらにかえて、政策阻止闘争の急進化や、あるいはプロレタリア人民の分断された経済要求や民主主義要求の急進化に、プロレタリア人民の政治決起を解体してきた。

われわれはこのような否定的な党派状況、党派闘争状況をうち破るべくこの数年間、階級的労働運動の陣形と大衆的プロレタリア政治統一戦線という階級闘争の基礎陣形を、全國主要都市に建設することをめざしてきた。だがこれだけでは決定的に不十分である。われわれは五・四闘争をもつて革命的政治闘争の組織化に本格的に踏みだす。プロレタリア国際主義への結集、武装蜂起とプロ独への結集、赤軍・ソビエトの準備と中央集権非合法党建設への結集をプロレタリア人民に真正面から提起してたたかう。生涯をかけて共産主義革命のために献身する革命的プロレタリアートへの飛躍をかけて、またみずから所属する労組、大衆団体内の大衆を共産主義の道へと組織しつづける前衛への飛躍をかけて、五・四首都へ総決起するよう呼びかける。

同時にわれわれは、このような革命的政治闘争のための共闘を、あらゆる原則的党派、活動家組織とのあいだで形成していくための努力を本格的に開始する。それは必ずやこの数年間形成されてきた急進民主主義党派ブルックと右翼日和見主義党派ブルックの対立に、わが国の階級闘争と党建設をめぐる党派闘争・論戦が解体されてきたという否定的状況をうち破る、画期的第一歩となるであろう。

政治共闘を建設せよ

五、1 國爭二已

政治共闘を首都におしだしていくたたかいとして組織しなければならない。

八三年の三里塚闘争の分裂以降、現代急進民主主義と右翼日和見主義はともに急速に、プロレタリア政治闘争の阻害物として転落してきた。現代急進民主主義は戦闘団主義ブランキズムに純化し、右翼日和見主義の多くは統一戦線党、協議会党を展望する解党主義「建党協」に身を寄せ、市民運動を前面に立てた市民主義統一戦線を横行させてきた。これらはいずれも労働運動の流動に対応しえず、もつとも広範なプロレタリアートをプロレタリア政治要求へと前進させつづけるための大衆的プロレタリア政治統一戦線の形成に対立し、階級闘争の進路をさし示しプロレタリア政治要求への結集を正面から提起するプロレタリア政治闘争（革命的政治闘争）の組織化を否定するものである。諸党派はこれらにかえて、政策阻止闘争の急進化や、あるいはプロレタリア人民の分断された経済要求や民主主義要求の急進化に、プロレタリア人民の政治決起を解体してきた。

われわれはこのような否定的な党派状況、党派闘争状況をうち破るべくこの数年間、階級的労働運動の陣形と大衆的プロレタリア政治統一戦線という階級闘争の基礎陣形を、全國主要都市に建設することをめざしてきた。だがこれだけでは決定的に不十分である。われわれは五・四闘争をもつて革命的政治闘争の組織化に本格的に踏みだす。プロレタリア国際主義への結集、武装蜂起とプロ独への結集、赤軍・ソビエトの準備と中央集権非合法党建設への結集をプロレタリア人民に真正面から提起してたたかう。生涯をかけて共産主義革命のために献身する革命的プロレタリアートへの飛躍をかけて、またみずから所属する労組、大衆団体内の大衆を共産主義の道へと組織しつづける前衛への飛躍をかけて、五・四首都へ総決起するよう呼びかける。

同時にわれわれは、このような革命的政治闘争のための共闘を、あらゆる原則的党派、活動家組織とのあいだで形成していくための努力を本格的に開始する。それは必ずやこの数年間形成されてきた急進民主主義党派ブルックと右翼日和見主義党派ブルックの対立に、わが国の階級闘争と党建設をめぐる党派闘争・論戦が解体されてきたという否定的状況をうち破る、画期的第一歩となるであろう。

# 独裁は倒れた

の幕あけに連帯しよう！

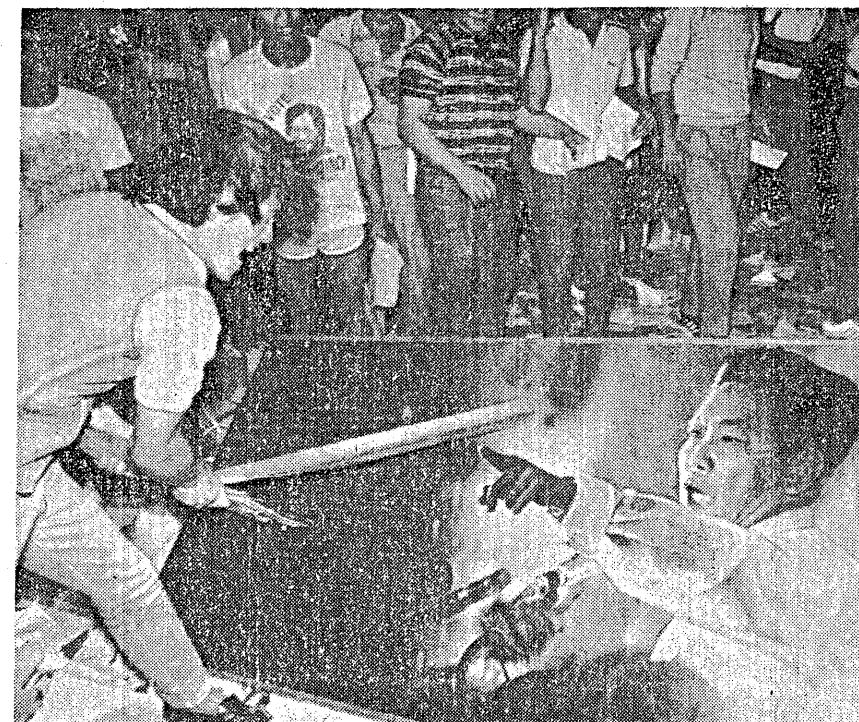
## 激動を規定した要因

二月七日、一年繰りあげの大統領選挙の投票がフィリピンでおこなわれた。マルコスは殺人、テロ、ピン支配階級内部の分裂であつた。それはまず、マルコス派のブルジョアジー・地主と、ラウエル（現ス派ブルジョアジー・地主の対立として煮つまつていった。さらにマルコス自身を分裂させた。

そして第三に、エンリレラのクーデターを指導した米帝の強力な介在であった。米帝はフィリピンにおける民族解放一共産主義革命を阻止するために「マルコスを止めざす勢力が形成され大きく成長していた。

新政権は日米帝への経済的従属を強めるだけでなく、政治的にも日本帝へのより一層の従属を深めよう。と同時に共産主義勢力（フィリピン共産党・新人民軍）にたいする予防反革命、反共反革命政権としての政治的性格をいづれ鮮明にしていくだろう。

たしかに現在、いわば臨時政府部にフィリピン支配階級内の諸々のグループを包含しており、いま



マルコスの油絵に棒でなぐりかかる若者（マラカニアン宮殿）

この激動の全過程を決定づけた要因は次のものであった。

## 新政権の階級的性格

第一に、長年にわたる反マルコス独裁をかけた全人民的大衆闘争の存在とその爆発であった。そしてこの内部には反帝民族解放をめざす勢力が形成され大きく成長していた。

第二に、八三年のベニグノ・アキノの暗殺を機に拡大したフィリピン支配階級内部の分裂であった。それはまず、マルコス派のブルジョアジー・地主と、ラウエル（現ス派ブルジョアジー・地主の対立として煮つまつていった。さらにマルコス自身を分裂させた。

そして第三に、エンリレラのクーデターを指導した米帝の強力な介在であった。米帝はフィリピンにおける民族解放一共産主義革命を阻止するために「マルコスを止めざす勢力が形成され大きく成長していた。

新政権は日米帝への経済的従属を強めるだけでなく、政治的にも日本帝へのより一層の従属を深めよう。と同時に共産主義勢力（フィリピン共産党・新人民軍）にたいする予防反革命、反共反革

全世界の注視のなかで、二〇年におよぶマルコス独裁体制は打倒された。それはフィリピン革命の本格的な幕あけを告げ知らせる号砲であった。フィリピンでの人民の快挙は全世界のプロレタリアート人民を大いに勇気づけられた。た。フィリピン革命連帶闘争のさらなる前進のために、われわれはここで一連の事態の基本的性格、フィリピン階級闘争が直面する課題、われわれの任務等についての見解をあきらかにしておきたい。

## 二月激動に関するわれわれの見解

加速する以外にありえないこと、このような判断にもとづいて米帝はクーデターの発動へと踏みきつた。それは追いつけられたクーデターであった。米帝は今回、選挙をどうした平和裡の政権移譲を望んだのであるが、フィリピン支配階級の内部分裂という支配階級の弱さと、巨万の決起を実現した人民の側の強さが、米帝をクーデターという手段の発動へと走ることを余儀なくさせた。

これらの諸要因は混然一体となってマルコス追放を実現したかに見える。しかし反マルコスの一点のである。だが事態はここで止まらなかつた。エンリレラ軍改革派のクーデターと連動するかたちとなつてフィリピン人民がマニラを中心で決起をはじめ、マルコス派の軍隊は人民に包囲されて解体し、ついに追いつめられたマルコスは二六日、マラカニアン宮殿を捨てて国外へ逃亡した。ここにおいて二〇年間にわたりフィリピン人民の頭上に君臨してきたマルコス「王朝」は崩れ去り、かわって旧マルコス派と連合したアキノ新政権の樹立へといた。この激動の全過程を決定づけた要因は次のものであった。

新政権は日米帝への経済的従属を強めるだけでなく、政治的にも日本帝へのより一層の従属を深めよう。と同時に共産主義勢力（フィリピン共産党・新人民軍）にたいする予防反革命、反共反革

新勢力に成長したフィリピン共産党・新人民軍の伸長を助け、フィリピンにはまさに革命的情勢が到来しようとしていた。このことを帝国主義としても鋭く、深い危機感をもつて認めた。マルコスはこれを阻止しなければかりかむしろ

# 軍は包囲され

# フィリピン共産主義革命

米帝にとつてフィリピンは、自己の反革命軍事戦略上の要である。フィリピンはベトナム、インド洋、中東へと通じる米帝にとつての衝突であり、クラーク、スピックル、米軍基地は絶対に失うことのできぬ戦略基地である。このフィリピンで反帝民族解放一共産主義革命を阻止すること、自己の新植民地主義支配を維持することは、米帝国にとって死活問題である。マルコスの排除、クーデター発動の目的は、そのための予防反革命であつた。

他方、日帝は今日、米帝とのなるべくフィリピン経済の命脈を握る帝国主義として大きな経済的位置を占めている。米帝のアジアにおける後退と、日帝のアジア・太平洋地域における「宗主国」的位置の増大は、日帝のフィリピンにたいする政治的支配をも、不可避に抗する公然化させていくであろう。

## 新局面を迎えた革命

かしそれらは不可避にこの政権の階級的性格にそつて、あるひとつの方に向むかって整理され再編

されていくだろう。まずラモスを中心とする旧マルコス派と、議会主義的民主主義に立脚しようとするとアキノ派との亀裂が拡大するにちがいない。

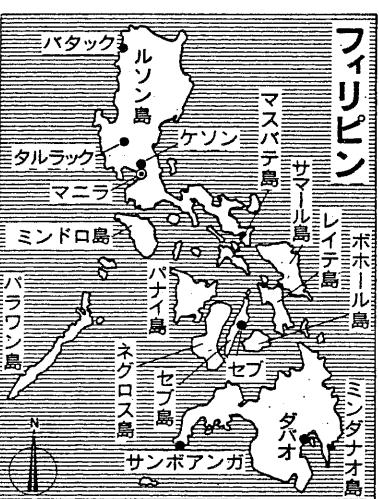
現状ではアキノ派がヘゲモニーを握っている。それは新政権がフイリピン共産党幹部をふくむ全政治犯を釈放したことにもつともよく示された。アキノ派が政権の前面に立っているのは、フイリピン支配階級総体の弱さの反映であり階級闘争の前進と人民のほどばしるたたかいのエネルギーになかば強制された結果にすぎない。新政権は労働者人民を新政権のもとにつなぎとめておくために、ぎまん的な「国民的和解」のキャンペーンなど、アキノ派による民主主義のプロパガンダなくしてはやっていけない。

## 日米帝国主義の野望

すでにみたように新政権のもとで日米両帝国主義の新植民地主義支配がよりいっそう強化されるのは確実である。

ロシア革命をはじめとするいくたの革命の経験は、プロレタリア人民の蜂起の前にはいかに強力な近代的軍隊といえども無力となる

ト・貧農にとつて、彼らの貧困と悲惨の根柢が日米帝の新植民地主義支配とこれと結びつ



八六春闘は世界資本主義の危機のただなかにある。一九七三年の第一次石油危機以来、世界資本主義は一時的な景気回復をはさみながらも、全体として慢性的危機のうちにあり、一時的な景気回復はむしろ次のより大きな危機を準備するものにすぎず、国際的な帝国主義間の調整や、各国経済政策の変更などのび縛策をつき破って、解決不能な危機が蓄積されつづけている。米・日・EC間の貿易摩擦問題、保護主義の台頭、各国財政赤字の増大いわゆる開発途上国を中心とした累積債務問題の深刻化、アメリカの純債務国への転落と史上空前の財政赤字。貿易赤字、さらに昨年九月にG5（先進五ヶ国蔵相・中央銀行総裁

# 世界資本主義の危機 と欺瞞的内需拡大論

大衆運動のボストン・ストライキ、生産性基準原理などのブルジョアジーの賃金抑制論を尻おしする経済整合性論などの賃金自肅論。春闘からたたかいが消え、それは文字どうり死せる賃金決定機構と化しつつある。同時に春闘の崩壊は、戦後日本労働運動の中軸を占めた総評労働運動の破産をも意味する。総評は八七年全民労連発足を第一段階とする解体の過程に、すでに足を深く踏み入れた。

帝国主義労働運動の台頭、総評の解体という現状のもとでわれわれは、プロレタリア大衆を社会主義にむかって組織する階級的労働運動の飛躍を実現せねばならない。

現状のものでわれわれは、プロレタリア大運動の飛躍を実現せねばならない。

また世界資本主義の危機は、全世界の被抑圧人民に大規模な飢餓（アフリカなど）、天井知らずのインフレと高物価（南アメリカ諸国）、失業の脅威をもたらしている。米・日・西欧諸国では軒みな軍拡、福祉切り捨て、労働運動抑圧の政策が強化されている。世界経済の危機はアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国との階級矛盾を激成し、マルコスを退陣させたフィリピン労働者人民のたたかいをはじめ、韓国、南アフリカなどでの反独裁や反アパルトヘイトをかかげたたかいが前進している。

本年の春闘の特徴のひとつは、資本家団体が円高不況を理由にした「我慢の哲学」をくりかえしているのにたいし、既成労働団体の側は内需拡大論をもつてこれに「対抗」しようとをしていることにある。昨年十月に労働団体と全民労協で発足した八六賃闘連絡会はそのアピールのなかで次のように主張した。

「積極的賃上げの実現、労働時間短縮の推進大規模減税の実現による内需拡大こそが貿易摩擦の壁に直面している日本経済のとるべき道である」。そして十二月に統一要求基準を「7%もしくはそれ以上」と決定した。

内需拡大論を唱えながら7%という低い要求をかかげていること 자체が全民労協派の本性を示しているのであるが、より大きな問題は賃闘方針という形をとりながら日本資本主義防衛のためのブルジョア的経済政策を提起しようとしている点にある。ブルジョアジーの一部からは内需拡大論を、貿易摩擦問題など米・ECとの緊張を緩和するための方策として評価する声も出ている。しかしそれはあくまでもブルジョアジーには一時しのぎにす

要求するものは、世界資本主義の危機、自國內ブルジョアジーの危機を利用して、資本主義倒壊にむけて階級闘争をどう前進させるかにある。労働運動もまたこの課題を背負わねばならない。ところがわが国の労働四団体（全民労協派）は、危機に立つ資本主義とブルジョアジーをどう救済するのかに最大の関心事をおいでいる。

’86春闘  
アピール

# 全民労協春闘と対決し全国に 階級的地域共闘を建設せよ！

ある。フィリピンのプロレタリアートは、半封建的地主支配のもとにおかれ土地革命を要求する農民を革命の同盟軍にひき入れないかぎり、革命を成功させることもできないし、樹立した権力を一日たりとも維持できない。しかしそのことは当面する革命の性格を民主主義革命と規定すべきことを意味するものではない。そうではなく農民の土地革命の要求を広範に糾合し、農民を同盟軍としたプロレタリア革命の路線を確立していくことが求められているのである。

新人民軍の武装闘争のみならず、  
都市における武装蜂起の準備を包  
含する軍事戦略を確立することで  
ある。第三には都市のプロレタリ  
アートを、独自の政治要求と階級  
組織のもとへと結集させていくた  
たかいをより強化していくことで  
ある。

強化される日帝のフィリピン新植民地主義支配をうち破ること、これが第一である。

第二にフィリピン革命の前進にとって不可欠の課題である今日の国際共産主義運動を支配するスターリン主義、また中共のこれにたいする敗北と後退という否定的現実を打破する国際プロレタリアートの共通の努力を前進させることにある。このことと結びついてのみ、フィリピン革命連帯の眞の義務がはたせる。とりわけソ連共産党がマルコスを最後まで支持した現実や、中共が内政不干渉を決めることである。

そして第三にブルジョアジーに由つておおいからされ、ゆがめられて報道されているこのかんの激動の真実を、プロレタリア人民のなかに暴露し宣伝し、いままさに序幕をきり落したフィリピン革命への熱い階級的共感と連帯のうねりを、大衆的につくりあげていく。

ぎない。日本資本主義にとって輸出主導型経済を内需主導へと転換していくことは構造上不可能に近く、帝国主義間対立の激化によって生まれる矛盾は国内における搾取・収奪の強化、アジア諸国などへの新植民地主義支配の強化へと転嫁されるほかはないのである。内需拡大論はブルジョアジーの息つきを助け、危機の深さをおおいにかくし、結局は国内外プロレタリアートへの搾取強化へと結果するのである。

ブルジョアジーと肩を組んで日本經濟を救えの大合唱のなかにプロレタリアートを組織しようとする全民労協派のペテンにたいし、われわれはブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立が非和解なものであること、現在の危機は資本主義的生産様式そのものにもとづくブルジョアジーの危機であって、それは社会主義革命の前進へと転化されねばならないことをプロレタリアートにむかってくりかえし宣伝しなければならない。

## 労働組合の階級性を放棄する全民労協派

全民労協は今春闘において帝国主義的労戦統一にいっそう拍車をかけ、内部に一定の対立をはらみながらも、既存の労働四団体の解散、新たなナショナルセンターの結成を射程に入れた段階に突入しようとしている。全民労協は昨年十一月に開催した第四回総会で連合体の結成を八七年秋とし、さらに二年後の八九年に官公労をふくむ「全的統一」をめざすという方針を決定した。これをうけて本年二月には連合体綱領へ「進路と役割」と規約の原案を作成した。連合体綱領案は全民労協発足時に踏み絵となつた「基本構想」をベースとしたものであり、「自由、平等、公正で平和な社会をめざす」「自由にして民主的な労働運動の強化・拡大をめざす」「国際自由労連に一括加盟し国際的役割を分担する」「官公労働組合との相互理解を深め、一国一ナショナルセンターの実現をめざす」「統一を妨害するあらゆる独善的利己的勢力に対して毅然たる態度をとる」「政権交代を可能にする健全な議会制民主主義の実現をめざす」などの理念や方針をもりこんでいる。反共、資本主義擁護、労資協調を本質とする「基本構想」の質はそのまま継承されているといえる。綱領、規約につづき、夏の各産別大会にまことに、五月までには財政問題や地方組織についての案がまとめられる予定になっている。

同盟は本年一月の第二二回大会で、連合体と既存ナショナルセンターの併存を主張する総評を批判し、連合体移行時には同盟は解散すること、二重加盟防止の意図から連合体会費を高めの一人月額三〇円とするという案などを提起した。同盟の攻勢にたいして総評は

「全的統一」をタテにむなし抵抗をおこなっているが、積極的な運動路線もすでにまとまり、主力の官公労も臨調一行革攻撃に抗しえず、基盤はガタガタになつていているという地盤沈下のなかでは、もはや解体されるのを待つ死せる巨象でしかない。昨年は電電と専売の民営化によって公労協体制は実質崩れ、本格化する国鉄分割・民営化の嵐のなかで労働が國鉄労使共同声明に名をつらねるなど、官公労諸組織の屈服・裏切りも顕著になつてきている。

労戦統一の進行にともなつて、全民労協傘下の労働組合の多くは労働組合の階級的性格を自ら否定・放棄し、独占資本の利益と一体化した労働者支配機構にますます転落している。今春闘では、造船重機労連（同盟）に加盟する日立造船、三井造船の二労組は造船不況を理由にしてベア・ゼロ要求を決定するという笑えない話も生まれている。しかもその病菌は「全的統一」をまたずして官公労諸組織もたらえはじめている。組織率の一〇年連続の低下（八五年度で二八・九%）、雇用構造の変化のなかで増加する臨時委託、派遣、パートなどの不安定雇用労働者の放置、賃金・労働条件の格差の拡大、国鉄一〇万人をはじめ造船、鉄鋼などで吹き荒れる首切り合理化——これらのことは帝国主義的労戦統一の進行と不可分であり、むしろその必然的結果であるときいえる。

まさに労働組合の社会的存在意義は危機に陥っているのである。いまわれわれの手によつてこそ労働者大衆のもともと基礎的な団結体である労働組合の階級性が復権されなければならない。

## 階級的労働運動飛躍

### のための二つの事業

八六春闘は全民労協派との全面対決をかかげてたたかわなければならない。

八二年末の全民労協結成から三年あまりの月日が流れだが、そのかん反戦統一派によるさまざまな動きがあつた。しかし総括的にいふと反労戦統一諸グループのどれもが、強固な物質的基盤を獲得しえなかつただけでなく、全民労協の資本主義防衛路線に対決して資本主義の打倒へと大衆を教育・訓練し目ざめさせれる労働運動、プロレタリア階級闘争の広大な基盤としての労働運動をつくりだしていくという点で敗北している。

三つのグループを取りあげよう。第一に、

日共・統一労組想がいる。彼らは共闘できる部分をふくめその勢力は三〇〇万人に拡大したと豪語しているが、中心は自治労、教組など全国に点在する官公労であり、民間大手に基盤はない。運動論的にも国民春闘再構築などの主張にみられるように総評の再版の域を出ず、しかも少なからぬ部分でかつての総評

よりもずっと右寄り路線である。労戦統一の最終段階では、排除の結果としてナショナルセンター旗上げに踏みきるであろうが、それは実態上も内容上も階級闘争の発展に、以上のことから寄与できるものではない。

第二に、労研センターがいる。この組織はほぼ運動体として改組されることのないままに消滅する運命にある。路線的には総評の戦闘的再生論をかかげつづけてきたことの結果である。この主要な勢力であつた協会派系労組は最終的には統一労組想への合流へと向かわざるをえないであろう。

第三に、労働情報グループ、全国労組連がいる。彼らは、反労戦統一派の全国結集を呼びかけてはきた。たしかに時々の集会やアピールを通じて右翼再編反対の政治的態度を表明しつづけてはきた。しかしこの寄合世界的性は克服されず、左からの再編主体としての登場をかちとることはできなかつた。総評主義、総評守れ運動への批判をあいまいにしたこと、労働組合と活動家組織を区別せずに問題を立てたことなどの誤りと結びついで結局漠然とした潮流以上を脱しえなかつた。

労線統一の新しい段階のなかで、いくつか

の新しい模索が開始されつつある。われわれはこれらに注目しつつ、あらゆる単組、単産、

地方・地域組織のなかから、反労戦統一に労働者大衆を再度立ちあがらせていかねばならぬ。全民労協派との組織戦を全国のたたかう労働者とともに開始するためにわれわれは次の二つの事業を重視する。

第一に、反労戦統一派の階級的地域共闘を構築しつづけることであり、そしてこれを基盤として全国主要単組・単産が全民労協派に制圧され、これが官公労にも波及しつつあるなかで、地域は階級的労働運動派の飛躍の可能性を秘めた戦略的戦場として重視されねばならない。全民労協派との組織戦を全国のたたかう労働者とともに開始するためにわれわれはすでに民間主要単組・単産が全民労協派に制圧され、これが官公労にも波及しつつあるなかで、産別や地評・地区労内部での反右派闘争、官公労での攻防戦の受け皿を地域・地方的につくりだす必要は増大しているからである。

第二に、各地の階級的地域共闘を構築することである。現在あちこちで左派ナショナルセンターの可能性がさまざまに論じられているが、まず前提として左派の自立したナショナルセンターを旗上げできる条件は現状ないという認識に立ちつつ、同時にナショナルセンター万能論ともいえる、階級的労働運動の前進のための全課題をナショナルセンター展望のなかに解消しようとする傾向にわれわれは反対する。いま実行可能であり、かつ必要なのは、地域共闘、地方連合の建設を促進し、その強化に力を發揮する全国協議体とその指導部の建設である。

今春闘を以上の見地から階級的に領導せよ。

